

職人の技

シリーズ②⑤ 〈整体師〉

聖心堂

馬屋原 孝恵 さん

文=岩瀬 大二
text: Daiji Iwase写真=北原 幸児
photo: Kouji Kitahara

秋華賞。3歳牝馬の女王を決める、競馬、秋のG1レース。真つ先にゴール板を駆け抜けたのは、馬屋原さんが面倒を見ているブラックエンブレムだった。新馬戦、そして春の桜花賞。期待されながらも結果を残せなかったレースもあった。でも、みんなが「彼女」の力を信じていた。いや、それ以上に、関係者すべてが彼女のことを愛していた。

「こちらからはつらそうに見える調教でもきちんと応えるタイプ。こちらが切なくなるぐらい真面目な子です。秋華賞の前には『私もうダメ』なんて感じで寄ってきて…。だから言っておきました。『なあと煮詰まってるのよ』って(笑)」

すっかり心を許す仲になっていた馬屋原さんが、そう言いながら耳のあたりをなでる

と、気持ち良さそうに身を委ねる彼女。体をほぐしたり、メンテナンスするだけが整体師の仕事ではない。体を通じて心を柔らかくすること。それこそがその仕事の本質なのだろう。

馬の整体という仕事自体は、それほど新しいものではないという。とはいえ昔ほどの馬でも一緒、とにかくレースだけに勝てればいい、というような考え方もあった。

「本当は、馬それぞれに個性があつて、また、レースや調教の種類によつての疲れ方も違うんです。それに治療をし

たからといって、すぐにタイムが速くなったりそれで勝てるわけではありません」

馬の幸せを考えたものばかりとはいえない状況が変わってきたのはここ10年。「瞬の勝負で馬を酷使することが目的ではなく、馬が信頼し、何のために治療を施すのか？」

「歴然と変わるの馬の人に対する態度。かみついたり、機嫌が悪かったりする馬が治療をすることはいなくなりました。治療によつて大切にされていることが分かると、脳がリラックスしていきます。そうすると人を信頼して、調子も良くなるんですね」

フィジカル面の治療を通してメンタル面までアプローチすること。

「調教でもいうことを聞きやすくなります。むちで打たれても、痛いことをされていたり無理にやらされるといふのではなく、馬が信頼して協力してくれる。そういう方向に向かつていくんです」

そのために、馬屋原さんが心掛けていることは、馬に向き合い、語り掛けること。「痛いところに触るとき、やはり馬も嫌な顔をして警戒します。そんなときは『ここが痛いんでしょ?』と一言いながらさすつてあげる。馬は『なんで分かるの?』

というように
じつと顔を見
つめてくるん
です(微笑)」

身を委ねているうちに血行が良くなると「ふううーん」というため息を漏らしたり、あくびをしたり、そして眠そうな顔をしたり…。筋肉がほぐれるからすぐ優勝する、そんなに競馬の世界は甘くはない。調教師、既務員、騎手、放牧先の牧場スタッフ…多くの人々がその瞬間を目指して、全精力を傾ける。その中で、この仕事の面白さがある。

「そばにいる既務員さんもお馬さんが好きなので、気持ちの良い顔をしていると喜んでくれて、安心してくれます。直接治療をするだけではなく、既舎によってはスタッフの方に治療の指導もしています」

信頼感と安心感が大切なのは 馬も人も変わらない。



馬を大事にする心が広がってきたからこそ、馬の整体の重要性も認識されてきたのだろう。競馬へのファンの考え方も変わり、アイドル・ホースと呼ばれる馬たちの活躍もこれを後押ししてきた。この状況はファンにとっても関係者にとつても、もちろん馬にとつて

も素晴らしいことだろう。整体のプロとして馬屋原さんは、愛を支えていく。馬屋原さんは馬だけを専門にしているわけではない。もともとは人相手。今でも週の半分は船橋の団地の中にある自身が経営する治療院で、人の治療に当たっている。そこ

でも実はスタンスは変わらないと言う。「未勝利馬もGI馬も、近所のおばちゃんも、わざわざ遠くから来てくれる社長さんもみーんな一緒（笑）。やってあげよう！なんて偉そうなことを考えると相手に負担をかけてしまう。よかったら役に

立たせて、という気持ちでやっています」。疲労でガチガチになった筋肉をほぐすよりも、ストレスでガチガチになった脳をほぐす方がよっぽど大変だと馬屋原さんは言います。だからこそ信頼関係。痛みではなくとにかく気持ち良く感じさせてあげ

PROFILE

うまやはら・たかえ
一般企業退職後、整体を学び治療院を開設。「自分のリフレッシュにも」と知人を通じて牧場の馬の整体を見学したのがきっかけで馬に整体を施すようになる。今では月に50頭もの馬を診て回る。

ること。これは馬も人も一緒。「お母さんがなでてあげる。それだけで子どもはなんとなく気持ちがいいですものね」